



Title	大正期の少女雑誌『新少女』における西洋文化の受容 ：フランスに関する記事を中心に
Author(s)	渡辺, 貴規子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2024, 2023, p. 45-60
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/97322">https://doi.org/10.18910/97322</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 大正期の少女雑誌『新少女』における西洋文化の受容 —フランスに関する記事を中心に—

渡辺貴規子

## 1 はじめに

本稿で紹介するのは、大正初期の少女雑誌『新少女』（婦人之友社、1915年創刊）における西洋文化に関する記事についてである。筆者は、明治時代後期から大正時代初期の少女雑誌におけるフランス文学・フランス文化の受容の様相について、調査・研究を行っており<sup>1</sup>、その調査において、同時期の少女雑誌と比較して、『新少女』に西洋文化に関する記事が多く見受けられることが判明した。『新少女』はジャーナリストの羽仁もと子（1873-1957）が1908年に創立した婦人之友社より1915年4月に創刊され、1919年12月まで発行されたと推定される<sup>2</sup>、月刊の少女雑誌である。この雑誌に関しては、絵画部門主任に竹久夢二（1884-1934）を迎えたことで知られるものの、先行研究は非常に少ない。先行研究では竹久夢二の投稿画評やキリスト教との関係について中心的に扱われており<sup>3</sup>、『新少女』という雑誌の性格を明らかにするための興味深い指摘が複数あるものの、読み物の記事の内容や、誌面全体に関して明らかにされたとは言い難い。また、資料館へのまとまった所蔵も1917年までの巻号のみであり、1918年以降の号は一部しか残存しないため<sup>4</sup>、雑誌の内容についてこれまで多くは判明していなかった。筆者は、第1巻1号から第3巻12号まで（ただし第3巻4号は除く）の計32号の内容を目視によって確認し、ヨーロッパ各国およびアメリカの文学作品の翻訳・翻案、西洋文化に言及された記事を調査し、本稿末の表にリスト化した。これらの中に、読者投稿欄における記事に対する感想や、編集後記は含まれない。

本稿では、まずは『新少女』における西洋文化関連の記事を、筆者がとくに関心を置き調査するフランス文学・フランス文化に関する記事を中心に紹介し、整理したい。そして、この少女雑誌が積極的に西洋文化を受容し、紹介した背景、及びそこで提示された少女読者に対する教育観との関係についても考察したい。

## 2 『新少女』の創刊まで

本章ではまず創刊者の半生とその思想的傾向を見ておきたい。『新少女』の創刊者、羽仁もと子は、1873年に八戸の旧士族、松岡家に生まれた。松岡家はかなりのインテリであったと考えられ、教育熱心な祖父の下で利発な少女として育った羽仁は、東京の府立第一高等女学校を卒業後、巖本善治（1863-1942）が校長を務める明治女学校でも学んだ。私立の明治女学校では学費が必要であったが、巖本善治に直訴して学費が免除され、さらに『女学雑誌』の校正をして寄宿料に当て、働きながら修学した<sup>5</sup>。第一高女時代には受洗し、プロテスタント信仰者となった。卒業後は盛岡で女学校の教員となり、一度目の結婚をするも離婚し、大

本稿において、大正時代の資料からの引用の際には、適宜旧字を新字に改め、ルビは省略した。

<sup>1</sup> 科学研究費補助金（若手研究）「明治後期から大正初期の少女雑誌におけるフランス文学・フランス文化の受容」（課題番号 21K12971、令和3年度～6年度）

<sup>2</sup> 1919年12月発行の『婦人之友』の中で、「この一月号からは、今までの新少女を『まなびの友』と改めて、少年少女向きの新しい読物をつくることにいたしました」とあり、小学校低学年の男女向きの新しい雑誌が創刊されることが予告された。（「小学二三四年程度の男の子女の子のための新絵雑誌『まなびの友』が出来ました」『婦人之友』13巻12号、1919年12月、24-25頁。）

<sup>3</sup> 小嶋洋子「竹久夢二と少女文化—『新少女』投稿画評と投稿画の変遷」『大正イマジュリイ』No.6、2010年、82-97頁。小嶋洋子「『新少女』における夢二と少女とキリスト教」『美学論究』26号、2011年3月、27-42頁。

<sup>4</sup> 日本近代文学館に、1915年4月～1917年12月発行の全号（ただし第3巻4号を除く）が所蔵され、大阪府立中央図書館国際児童文学館でも1915年発行の全号、1916年、1917年発行の一部の号を閲覧できる。1918年、1919年の巻号については、日本近代文学館、大阪府立中央図書館国際児童文学館、熊本県菊陽町図書館にその一部が所蔵されるばかりである。

<sup>5</sup> 斎藤道子『羽仁もと子一生涯と思想』ドメス出版、1988年、15-18頁。

きな無力感を味わったと言う<sup>6</sup>。1897年に再度上京し、報知新聞社に校正係として入社、1899年に記者となった。いわゆる「職業婦人」の先駆的存在であり、日本で初めての女性新聞記者であるとも言われる。

1901年に同僚であった羽仁吉一（1880-1955）と再婚し、報知新聞社を退社、その後に夫妻で『家庭之友』を創刊し、同時期に長女・羽仁説子（1903-1987）が誕生した。その生活は家計の維持のために夫妻で必死に働き、母・妻の役割もこなす多忙なものであった<sup>7</sup>。1908年には雑誌を『婦人之友』と改称するとともに、婦人之友社を設立した。羽仁は家庭生活の合理化を唱えた思想家・実践家であり、当時の『婦人之友』にもそれに関する記事が多数掲載されている。『新少女』の創刊は『婦人之友』創刊から7年後のこと、長女の説子がちょうど『新少女』の読者層の年齢に達していた。『婦人之友』に掲載された『新少女』創刊の予告では、その意気込みが述べられた。

『子供之友<sup>8</sup>』の翼の下に集まってゐる、可愛らしい方々の中には、(...)いま少し大人らしい読物を要求する方々も沢山あります。私共は(...)是非ともまづ少女雑誌を出したいと思ひます。『新少女』と名づけ、来る四月一日を以て初号を発行いたします。(...)『新少女』を出すための欠くべからざる準備の一つとして、私共は過去一年の間、今の多くの少女雑誌に就て、精密なる注意を払ふことを怠りませんでした。さうして、その聞いてみたよりも、思つてみたよりも、より多く不健全、より多く不注意な読物に充されてゐることを知りました。商売敵といふやうな卑しい心持からでなく、その柔かな頭には、已に彼らの人生観の芽出しかけてゐる、多くの可憐な少女たちに、断然、あのやうな読物は不適当だと云ひたいまでに思ひます。露の玉のやうに清らかに、そよふく風にも動かさる、多感なる彼等のハートのために、私たちは出来得る限り奮闘したいので御座います。（「『新少女』の創刊」『婦人之友』9卷1号、1915年1月、14-15頁。）

従来の少女雑誌は「より多く不健全、より多く不注意な読物に満たされて」おり、若い女性読者が読むのには「不適当」であると強く非難された。それでは『新少女』はどのような誌面を目指したのであろうか。内容については、次のような目標が語られている。

少女の思想を、その好む所と、その見たり聞いたり思つたりしてゐる事柄を利用して、巧みに教へ導くのには、どうしたらよいであらうか。少女の感情の、ややもすれば、不健全なる多感に陥らうとする傾きのあるのを、どうして、落ち着いた、安んずる所のある、優しさ美しさに、導いてゆくことが出来るであらうか。少女の好みの、多くは非実際的に走らうとしてゐるのを、どうしたら、着実にして高尚なる趣味に移らせることが出来るであらうか。（「『新少女』初号出来」『婦人之友』9卷4号、1915年4月、14-15頁）

今の少女の読物は、唯いい子だいい子だと云つて、上から撫でつけるやうなのでは何にもなりません。(...)本当に少女の心持を了解して、どういふ場合にかれらは不健全な心持に浸つて行くのか、みだりにセンチメンタルになるか、どういふ風にその心持をつかつたら、健全に活き活きと、趣味と理性と二つながら有する人格の基礎をつくること

<sup>6</sup> 一度目の結婚は恋愛結婚であったが、「本当に自分の無力を痛感したあの半年であった」と回想され、離婚の際に「死んだ気になって私の心の中にある愛を捨てることを決心」し、「決然と自分より大切な道を選んだ」と述べられた。そして「私は自分の愛のために、全人格を奴隸にし、また相手の虫のよい手前勝手な愛情の冒涜に、意気地なくこの生涯を任せなかつたことをありがたいと思っている」とも述べられ、回想によれば、この後、羽仁は誰にも知らせることなく単身上京して職を探し、報知新聞社の校正の職を得た。（羽仁もと子『半生を語る』、婦人之友社、新版、2008年、64-72頁。）

<sup>7</sup> 羽仁説子は、「私の生れ出た家庭は、経済的には随分苦しい生活だったとおもいます。（…）母はそのときのことを書いています。『女兒が産れたし、一あれやこれや小さい私の家庭は多忙を極めた、私の小児の教育と共に、本誌の編集は、私の家庭の事業として、心ながくその成長を楽しみたい考である。』」と回想した（羽仁説子『私の受けた教育』婦人之友社、1963年、28頁。）

<sup>8</sup> 『子供之友』（婦人之友社）は1914年創刊の児童雑誌で、幼稚園から小学校の児童を対象とした。

が出来るかといふことを、本当に考へて編集されたものでなければならないといふのは、私共の何よりも熱心に考へてゐる所のことで御座います。科学的な記事や、実際的の知識や、衛生上の注意も、どうしたら、多くの少女が喜んで読んで、（…）我々の知らねばならぬ日常の知識を遺憾なく備へさせることが出来るかと、考へて見ることは、また私共の大いなる努力に伴ふ、楽しみな方面で御座います。（「『新少女』第二号出来」『婦人之友』9卷5号、1915年5月、100-101頁。）

少女読者の好みに寄り添いつつ、彼女らの思考や好みが「非実際的」「多感」「センチメンタル」に傾くのを防ぎ、雑誌を通して「落ち着いた、安んずる所のある」「着実にして高尚な」ものに教え導いていくこと、さらには「趣味と理性と二つながら有する人格の基礎」を培うことが目標であると語られている。また、少女読者を楽しませながら、実際的な知識を伝えることも意識されたと分かる。このような誌面については、当時の『新少女』の読者により「在来の少女雑誌を占めていた安価で架空の物語などは一切抜きに、口絵の写真から内容の記事のすべてを少女の日常生活に取材し、雑誌の最初の頁には、羽仁夫人の『ジャンヌ・ダーコ伝』が掲載され、その次の頁には、靴下の継ぎ方、足袋の洗い方、など極めて実際的な記事が載せられていて、在来の少女雑誌の型を破った、年若い娘たちのために心をこめて編集した、地味で誠実な雑誌であった<sup>9</sup>」という証言も残っている。

このように『新少女』はその創刊時に、従来の少女雑誌と一線を画すことが強調された。従来の少女雑誌は「不健全」かつ「不注意」な読み物に満たされているという認識のもと、感傷的になりすぎない読み物と、科学的・実際的・日常的な知識の伝達により、少女たちの好みに寄り添いながら、「着実かつ高尚な趣味」へと教え導くことが目指されたのである。

### 3 『新少女』の先進性と西洋文化受容

『新少女』で従来の少女雑誌と一線を画した紙面構成が目指された点は雑誌のタイトルからも明らかとなる。次の引用は雑誌タイトルの由来に関する編集者の言葉である。

私たちは今、萌えいづるやうな種々の希望を持つてゐます。（…）期せずして、めいめいの新しい望みをここに集めた私たちの仕事に、誰の胸からも「新少女」といふ心持が自然に湧き出して來るのでした。この雑誌はかうして、私たちの間に、いつからともなく「新少女」と名付けられてゐました。（…）「新少女」はその進歩的なることに於て、その面白味の沢山なることに於て、眞實に皆様の樂しき友達の一人でありたいと思ひます。（「雑司ヶ谷より」『新少女』第1卷1号、1915年4月、119頁）

『新少女』の創刊号では雑誌の編集方針について多くは語られないが、上の引用のように「進歩的」かつ「面白味」の多い紙面を目指したことが明記された。この雑誌が目指した具体的な内容と目標については、本稿第2章で見た通りである。さらに興味深いのは、「新しい女」という言葉に対するコラムにおいて、次のように述べられている点である。

「新しい女」といふのは近頃の流行言葉ですから、皆さんの中には小耳にはさんでゐる方もあるでせう。流行言葉に余り深い意味のないもので、私などから見るとさんは凡て新しい少女です。いつの世にだって旧(ふる)い少女といふものはありません。（…）苟も人間として生きて行く以上は、凡てが新しい人間です。新しい人間でなくてはなりません。わざわざ「新しい女」と女にだけさういふのは、世間狭い人たちが面白半分的好奇心から出た流行の言葉で、永く「新しい女」などいふ言葉が行はれるとも思はれません。（「新しい女と言ふ語」『新少女』第2卷12号、1916年12月、104-105頁。）

周知のとおり、「新しい女」とは1913年に平塚らいてう（1886-1971）が『中央公論』誌上で「自分は新しい女である」と公言し、流行語となつた言葉である。明治末期から大正期にかけて、良妻賢母主義批判の言説として、社会主義者による「良妻賢母」批判とともに「新

<sup>9</sup> 西沢てる『新しい天地』聖山堂、1960年、9-10頁。

しい女」の言説が現れ<sup>10</sup>、実際に良妻賢母主義の抑圧を乗り越えて多分野の職業で活躍する女性たちが「新しい女」として新聞記事で伝えられてもいた<sup>11</sup>。引用のコラムでは、その言葉が自我に目覚めた女性たちへの揶揄・批判を含むことに苦言が呈されるとともに、読者全員「新しい少女」であると述べられた。この記述は自身も仕事と家事・子育ての両立て多忙であった創刊者の羽仁が、女性の労働を肯定し、主婦となる女性も、家庭生活の合理化のために自発的かつ積極的に貢献することを望ましく考えていたことと関係するであろう。これらの引用から『新少女』は、「新しい少女」を読者とする「進歩的」な雑誌となることが目指されたと言える。

実際に雑誌の内容を見ると、雑誌の「進歩的」であると考えられる側面について具体的に三点にまとめられる。第一に、たとえば以下の引用のように、読者が自分の頭で考え、自分のことは自分で決め、主体的に行動すべきであると、繰り返し説かれる点である。

めいめいに子供の時から、よく気をつけて、自分のことは自分でするやうに、またよく考へて、自分の道は自分で歩む様にしなければなりません。大きくなつて、その行く道がだんだん混雑して来ても、幼い時から自分の道をよく考へて歩いて来た人は、まごつくことがありません。(羽仁もと子「新少女伝其の一 八百屋お七」『新少女』第1巻1号、1915年4月、11頁)

併し私は(...)父母のいひつけを守らう守らうとばかり思つてゐる少女を、上の上の少女だとは思つてゐません。といふのは私は少女といふものは、いつでも親や先生の仰有る通りにならなくともよいものだと思つてゐるからで御座います。(...)人といふものは生れた時から、一生懸命に自分で自分を護り育てて行かなければならないやうに出来てゐるのです。(...)あなた方の身体や心を、本当に護り、養ひ育てて行く人は、あなた方自身の外にはありません。(羽仁もと子「少女はどうしても親や先生の仰有る通りにならぬものでせうか」『新少女』第1巻9号、1915年12月、27-29頁)

一つ目の引用の「新少女伝其の一 八百屋お七」は、創刊号の冒頭に掲載された読み物で、目次でも他の記事よりも大きなフォントかつ太字でタイトルが表記された。羽仁もと子自らが執筆したこの記事に含まれる教訓は、とくに読者に伝えるべき重要なものであったと思われる。また、二つ目の引用の羽仁の論説でも、「あなた方の身体や心を、本当に守り、養い育てていく人は、あなた方自身のほかにはありません」と、自分の言動は自分で責任を持ち、生きることが明確に説かれている。

第二に、身体を丈夫にし、体を積極的に動かすことを推奨する点である。1916年には『新少女』運動部と称した読者参加型の運動クラブも創設され、雑司ヶ谷の婦人之友社近くに運動場を設け、定期的に運動会も催された。その目的は次のように述べられている。

私どもはまづ第一に身体が丈夫でなくてはなりません。身体が弱くつては力いっぱい勉強することも出来なければ、愉快に遊ぶことも出来ません。大きくなつて、立派な母親になつて、子供を育ててゆくことも出来なければ、進んで世の中のために、有用な働きをすることも出来ません。(「『新少女』運動部の新設」『新少女』第2巻2号、1916年2月、34頁)

身体を丈夫にする目的は「立派な母親になつて、子供を育ててゆく」ことだけでなく、「進んで世の中のために、有用な働きをする」ことも挙げられた。またイギリスの乗馬文化を紹

<sup>10</sup> 卒田和恵『戦略としての家族』、新曜社、1996年、119-120頁。社会主義者や「新しい女」の言説における良妻賢母主義批判、および良妻賢母主義擁護論については、深谷昌志の分析を参照した。(Cf. 深谷昌志『良妻賢母主義の教育』、黎明書房、1966年、228-237、251-267頁。)

<sup>11</sup> 『東京朝日新聞』の連載「東京の女」シリーズ(1909年8月29日—同年10月22日)、『読売新聞』の連載「新しい女」シリーズ(1912年5月5日—同年6月13日)がそういった記事に当たる。(Cf. 佐伯順子『明治〈美人〉論』NHK出版、2012年、172-195頁)

介する記事の中では、「優しげな貴婦人、花のやうな令嬢たちが、障害物やら柵やらを、物の数ともせずに乗り越えて、同行の男子をして顔色ならしめることも、決して珍らしくはない」と申します<sup>12</sup>」と書かれ、時には男性のように積極的でも良いとされた。

そして第三に、西洋文化を積極的に紹介する点である。本稿冒頭でも述べたように、本稿末の表に、西洋文化に関する記事をまとめた。1巻1号から3巻12号までの32冊の中に136の記事を挙げることができ、平均して各号4つ以上の記事が見られる。これは、創刊当時に発行されていた他の少女雑誌と比較しても、多数の西洋文化に関する記事が掲載されたと言える。たとえば、筆者の調査では、1915年1月から同年12月に発行された『少女の友』（第8巻1号～第8巻14号）、『少女世界』（第10巻1号～第10巻12号）での西洋文化に関する記事が各号平均2点程度であった<sup>13</sup>。

『新少女』に掲載された西洋文化に関する記事の内容については、小説の翻訳と伝記とがほとんど毎号掲載された。そのほか、外国の日常生活における小話や逸話、笑い話などを伝える小さな記事も見受けられる。

長編小説としては、ジョージ・エリオット（George Eliot, 1819-1880）『サイラス・マーナー』（原題：*Silas Marner*, 1861）の翻案が創刊号から第1巻6号にわたり掲載されたのを皮切りに、チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens, 1812-1870）『ニコラス・ニクルビー』（原題：*Nicholas Nickleby*, 1838-1839）の翻案が第1巻8号から第2巻12号の14号にわたり掲載された。これら2つのイギリスの長編小説のうち、フランスの長編小説、エクトール・マロ（Hector Malot, 1830-1907）『家なき娘』（原題：*En famille*, 1893）の翻案が第3巻1号から第3巻9号に「雛燕」のタイトルで連載された。つまり、長編小説の翻訳・翻案は、創刊号から第3巻9号まではほとんど途切れずに掲載された。こうした長編小説は連載一回あたり7,8頁から10頁以上の分量が割かれ、『新少女』という雑誌の呼び物となっていた。これらの長編小説の他、多数の短編小説の翻訳も見受けられる。

また、伝記については、単発での記事、特集記事のほかに、第2巻2号からは、松本雲舟（1882-1948）が「世界歴史物語」と題した連載を持ち、女性の歴史上の人物の生き方や逸話を伝える伝記物語を掲載した。この連載はタイトルを変えながらも、雑誌の終刊が近づいた1919年6月までは継続されていた<sup>14</sup>。

小説、小話、逸話、伝記のほかには、写真・絵画も頻繁に掲載され、読者は視覚的にも西洋文化に触れることができた。さらには理科（博物学）、家事、文化史関連の知識を伝える記事も見られ、内容は多岐にわたった。その中からまずは筆者がとくに関心を置き調査する、フランス文学・フランス文化に関する記事について見ていく。

#### 4 フランスの小説の翻訳受容—エクトール・マロ原作、五来素川訳「雛燕」

『新少女』には西洋文化に関する記事数が多いということもあり、フランス文学・フランス文化に関する記事も他誌と比較して多く見受けられる。その中でも、やはり長期にわたり連載され、『新少女』第3巻の目玉でもあった翻訳少女小説「雛燕」にまずは言及すべきであろう。当時の少女雑誌において、フランスの小説の翻訳・翻案が連載された例は少なく、現段階までの筆者の調査では、明治時代末期から大正初期の少女雑誌に掲載されたフランスの長編小説の翻訳は、『新少女』に掲載された『家なき娘』の翻案「雛燕」と、時事新報社の雑誌『少女』（時事新報社、1913年創刊）に掲載されたグザヴィエ・ド・メーストル（Xavier de Maistre, 1763-1852）原作の『シベリアの少女』（原題：*La Jeune Sibérienne*, 1825）の翻訳との2点のみである<sup>15</sup>。

<sup>12</sup> グラビア「馬に乗って狩猟にゆく西洋の少女」『新少女』第1巻第1号、1915年4月、63頁。

<sup>13</sup> 大阪府立国際児童文学館での、雑誌の内容の目視での調査による。『少女の友』第8巻1号～第8巻14号では27記事、『少女世界』第10巻1号～第10巻12号では28記事が見受けられた。

<sup>14</sup> 「松本雲舟」『近代文学研究叢書第65巻』、昭和女子大学近代文学研究所、1991年、141頁。

<sup>15</sup> 野村壽恵子訳「翻訳少女小説 シベリアの少女」『少女』（時事新報社）、37号-46号、1916年1月-10月。なお、野村壽恵子訳「シベリアの少女」に関しては以下の拙稿を参照されたい。渡辺貴規子「大正期の少女雑誌におけるフランス小説の受容—グザヴィエ・ド・メーストル原作、野村壽恵子訳『シベリアの少女』をめぐって」『大阪大学大学院人文学研究科紀要』1巻、2024年3月、159-181頁。

「雛燕」は、『家なき子』（原題：*Sans famille*, 1878）の作者でも知られるフランスの小説家、エクトール・マロの *En famille* を原作とする翻案小説であり、この小説は現在でも『家なき娘』の邦題で知られている。主人公の少女ペリーヌが逆境に負けずに自らの運命を切り開くこの物語の、梗概は以下の通りである。パリで母親と死別し、孤児となったペリーヌは、まだ会ったこともない父方の祖父が経営する紡績企業のあるフランス北部ソム県の街まで一人で自力でたどり着き、そこで自分の出自を隠しつつ、最初は工場の作業員として、やがては英語通訳・秘書として、社長である祖父の側で働く。そして働くうちに経営陣の陰謀を知ったペリーヌの行動が、彼らの不正を暴露することとなり、結末において、祖父に自分が彼の孫であるという出自を告白したペリーヌは、祖父の紡績企業の共同経営者となり、従業員たちの住環境・労働環境の改善にも乗り出していく。

この小説は、原作者のエクトール・マロが「意志の研究」をテーマに据え、主人公の少女が「意志の力による絶え間ない努力以外に何の支えもない」状態でいかに生き抜くか、ということに描写の重点が置かれた<sup>16</sup>。したがって、主人公は極めて自立的な少女として描かれ、職業面でも私生活の面でも幸せを自分で勝ち取る姿が描かれた。本稿第3章で言及した通り、『新少女』で読者に主体的な行動を促す教訓が繰り返し提示された点を考えるならば、このような少女像は雑誌の方針とも合致したと考えられる。実際に読者の評判も上々であり<sup>17</sup>、連載の翌年に婦人之友社より単行本が上梓された。

ただし、「雛燕」については、翻訳者の五来素川（1875-1944）がかなり改変を加えたということには留意せねばならない。つまり、主人公の少女の活動や自律性に関する表現について、制限を加える形で翻案されたのである。こうした改変について、筆者は以前別稿にて論じたがあるので参考されたい<sup>18</sup>。本稿ではその一例のみを以下に挙げておく。

- C'est cela, oui, c'est cela : tu arrives à Maraucourt ; ne brusque rien ; tu n'as le droit de rien réclamer, ce que tu obtiendras ce sera par toi-même, par toi seule, en étant bonne, en te faisant aimer... il est impossible qu'on ne t'aime pas... Alors, tes malheurs seront finis.

(*En famille* (1893), Amiens, Le Goût d'Etre/Encrage, 2006)

「そうよ、そのことよ。お前はマロクールに着く。決して急いではいけないよ。お前には何も要求する権利はないの。お前が得るものはお前自身の力で得なくてはいけないよ。自分一人の力で。善良でいることで、愛されることで。お前が愛されないと云うことはあり得ないわ。そうすれば、お前の不幸も終わる。」(拙訳)

「あゝ左様々々…お前が宮古へ行つて…けれど焦慮つてはいけません…お前の方から何うの彼うのといふ訳ではありませんから、ね…ただ、お前は皆様の気に入る様によく勤めて、さうしてお前がお世話になるやうにしなければいけません…お前のために勤めるのですから、ね…解りましたか…お前は皆様の気にいるやうに出来るでせう…花枝のやうな児が…人様の気に入らないことが…ありはしません…さうさへ成れば…もうお前の困ることはないでせう」(五来素川「雛燕」、『新少女』第3巻3号、1917年3月、44頁。)

母親が亡くなる直前に主人公に遺言を残す場面で、原作では、自分の幸せは自分の力で得るようにと教えるのに対し、翻案では、ただ周囲に愛されることで、幸せになるように説いたと改変されている。すなわち翻案では「皆様の気に入るやうに」という言葉が繰り返され、原作の「お前自身の力で（par toi-même）」、「自分一人の力で（par toi seule）」といった表現は訳出されていない。

婦人之友社の社員には、羽仁もと子をはじめ、フランス語運用能力の高い者がいなかった

<sup>16</sup> Hector Malot, *Le Roman de mes romans*, Flammarion, 1896, réédité dans les *Cahiers Robinson*, no 13, Presses de l'Université d'Artois, 2003, p.191-192.

<sup>17</sup> 「『雛燕』はほんとに面白い小説でございましたね、五来先生に御礼申し上げます、記者さま何うぞあれを一冊の本にしてお出し下さい。」(「読者だより」『新少女』第3巻第10号、1917年10月、38頁)

<sup>18</sup> 渡辺貴規子「大正初期における翻訳少女小説の一様相—エクトール・マロ原作『家なき娘』の初の邦訳をめぐって」『言語文化の比較と交流 10』、2023年、34-44頁。

ため、五来による改変について編集者側が把握していたかどうかは不明である。しかし、五来が改変を加えた後でさえも、主人公が働く少女であることに変わりはなく、中盤の物語がダイジェストの様に提示されることはあっても、最後に実の祖父と幸せになるまでの経緯やあらすじには変更は加えられていない。したがって、『新少女』という雑誌が、「雛燕」のあらすじや、働く少女としての主人公を肯定し、雑誌に掲載する小説として相応しいと評価したと言うことはできると思われる。

## 5 フランスの女性たちの伝記

その他のフランス文化に関する記事の中で、次に多くのページが割かれたのは、伝記である。中でも最も力を入れて書かれたと推測されるのが、第1巻第2号から5号にわたり連載された羽仁もと子の筆による「新少女伝其の二 ジャン・ダルク」である。フランスの絵本作家ブーテ＝ド＝モンヴェル (Louis-Maurice Boutet de Monvel, 1850-1913) による挿絵、パリのジャンヌ・ダルクの銅像の写真も付された。

羽仁は『新少女』の創刊号において、本稿第3章でも引用した「新少女伝其の一 八百屋のお七」を自ら寄稿し、自分のことは自分で考えるべきだという教訓を付したが、「新少女伝其の二 ジャン・ダルク」は、その連載の続きに相当する記事であり、「新少女伝」というタイトルが付されていることからも、重要度が高いと思われる。このジャンヌ・ダルク伝においても、焦点が当たられるのはジャンヌ個人の内面であり、彼女がどう考え、行動したのかという点である。筆者は以前、明治時代末期における少女向け読み物の中でのジャンヌ・ダルクの表象について論じたことがある<sup>19</sup>。その特徴として、ジャンヌの外見の美しさに関する具体的な記述、かよわさと内面の強さの併存、家族との描写や「家の娘<sup>20</sup>」としての側面の強調、の三点を挙げた。『新少女』でのジャンヌ・ダルク像は、これらの特徴も部分的には保つつもり、次の点で少し趣を異にする。つまり、ジャンヌの信仰心に焦点を当て、そこから生じる心の動きも描かれるという点、そして以下の引用のように、ジャンヌ自身が自分の内面と向き合う場面が存在する点である。

思へば自分は、ドムレミーの少女であつた頃から、久しい間明かに、自分の心に天の声を聞いてゐた。かくして自分は自分の使命を信じ、何をも恐れずにただこの使命を果したいと思つてからは、あらん限りの自分の智恵と、さうして力の及ばない事があると、いつも懷しの天使によつて、明かに天の力が添えられるのであつた。この頃の私はどうだらう、様々の思ひ煩ひに、気も心も疲れて仕舞つて、今はモウ神様は、自分に何を望み給ふのか、どうすることが御心やら、殆ど知ることが出来なくなつてゐるのだ。（羽仁もと子「新少女伝其の二 ジャン・ダルク」『新少女』1巻6号、1915年9月、12頁。）

「自分は」「私は」と自己を顧みるジャンヌが描かれている。こうした自己分析の場面は、明治時代末期の少女向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの伝記の中には見受けられない。もちろん、それにおいてもジャンヌの悲しみや心の動きは描かれるが、悲しみの原因は家族や故郷との別離にある傾向がある。それに対して『新少女』における伝記では、ジャンヌの心はあくまで彼女自身のものであり、家族の影響は希薄である。また、敵のイギリス軍に何度も警告し、戦闘において犠牲が最小限となるよう探る姿など、ジャンヌは知恵のある思慮深い女性としても描かれている<sup>21</sup>。そして自分の使命を信じ、信じたことを最後まで

<sup>19</sup> 渡辺貴規子「明治時代後期の少女向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの伝記—ヒロイン像の変容をめぐって—」『言語文化の比較と交流 9』、2022年、1-10頁。

<sup>20</sup> 「家の娘」という言葉は、明治時代中期以降の言説空間において、家庭内の役割を果たすことが求められた少女を表す概念として久米依子が下記の論文内で用いている。ここでの「家」は成員の相互の愛情で結ばれた近代的家族のイメージで語られる一方で、少女たちにとってあくまで娘としての「つとめ」を果たすべき規範と義務の場所であるとされる。(Cf.久米依子「少女小説—差異と規範の言説装置」、小森陽一ほか『メディア・表象・イデオロギー—明治三年代の文化研究』小沢書店、1997年、195-222頁、とりわけ196頁。)

<sup>21</sup> 「強いばかりでなく、ジャンは本当に智恵の深い少女でした。」(羽仁もと子「新少女伝其の二 ジャン・

やり遂げる姿が、読者も見習うべきものとして評価されている。

ジャンのやうに、国の安危を自分一人の肩に担つて立つやうなことは、普通の少女の境遇にはいと稀れな場合であります。併し私たちには、皆めいめいになしたい、なさねばならぬと思ふことが、必ずいつもあるものです。若しもその望みが、ジャンのように清く正しい、さうしてその事が、まためいめいに是非必要なことであつたなら、ジャンのやうに緊張した心持ちで、神の助けを祈りつつ只管に努めたならば、必ず成し遂げられるに違ひないと思ひます。(羽仁もと子「新少女伝其の二 ジャン・ダルク」『新少女』1卷4号、1915年7月、11頁。)

羽仁もと子が創刊号に執筆した「新少女伝其の一 八百屋のお七」、そして「新少女伝其の二 ジャン・ダルク」の両者は、そこで取り上げられる少女像には乖離があるようにも思われるが、自分のことは自分で決めねばならないという教えが見られる点では共通している。そして、羽仁の執筆したジャンヌ・ダルクの伝記からは、自分の心と向き合い、反省・分析すること、自らの信じることを成し遂げる意志の力に対する賞讃が見られる。

ジャンヌ・ダルクのほか、当時まだ存命中の知名度の高い女性を写真付きで特集した第3卷3号の「有名なる世界の婦人」の中に、フランスで活躍する女性として、マリー・キュリー (Marie Curie, 1867-1934) とサラ・ベルナール (Sarah Bernhardt, 1844-1923) が紹介されており、第3卷10号の「西洋の文豪逸話」では、ロマン主義作家ジョルジュ・サンド (George Sand, 1804-1876) について言及されている。たとえば女優サラ・ベルナールは、当時の少女雑誌で紹介される例は珍しいと言えるが、次のように紹介されている。

名女優として世界に其名を謳はれ、七十二歳の老齢を以てなほ花の様な少女に扮して、屢々観客をしてその妙技に感嘆せしむるサラ・ベルナールは、芸術の国と云はるる仏国の生んだ、劇壇の名花であります。十三歳の時から既に女優としての天才的才能を認められ、最も得意の役は『椿姫』と『クレオパトラ』ださうです。彼女は彫刻も絵画も出来、銃猟もする、ボートもこぐ、釣もするが、一番好きなのはテニスです。今は自ら戦場に出かけて、芝居を催し、兵士等を慰め、又士気を鼓舞してゐると云ふ事です。(「有名なる世界の婦人」『新少女』第3卷3号、1917年3月、33頁)

興味深いのは、女優としての名声が説明されるだけでなく、彼女が彫刻、絵画などの芸術活動へ関心を持つこと、そして「銃猟もする、ボートもこぐ、釣もするが、一番好きなのはテニスです」とスポーツ好きで活動的な女性であることが紹介された点である。さらにジョルジュ・サンドについては、短文で独自の視点により以下のように紹介された。

仏蘭西の女の小説家、ジョージ、サンドは世にもめづらしいほどの美人でした。けれども初めて文壇に立つた時には、一月に唯三円の収入があつた切りでした。その頃サンドは男の衣服を着て、町を平気で歩いてゐました。「どうして男の着物を着ておひですか。」と路で遭つた人が問ねました。「服装改良のためですか」「いいえ、経済のためです」とサンドは平気で答へました。(「西洋の文豪逸話」『新少女』第3卷10号、1917年10月、15頁)

「西洋の文豪逸話」ではほかにもエリザベス・バレット・ブラウニング (Elizabeth Barrett Browning, 1806-1861) 、ルイザ・メイ・オルコット (Louisa May Alcott, 1832-1888) 、ジョージ・エリオットといった女性詩人、女性作家が紹介されたが、彼女たちの文学者としての功績よりも、幼い頃の兄の死を乗り越え詩人となった逸話、非常にお転婆な少女時代、労働に勤しんだ娘時代についての短文が掲載された。ジョルジュ・サンドもまた、自活のために「平気で」男装をして町を闊歩する逞しい女性として紹介された。

以上のように、フランスの知名度の高い女性の伝記や逸話が書かれる際にも、その功績を

---

ダルク」『新少女』1卷5号、1915年8月、7頁。)

称えるだけでなく、その生き様を表す記述がなされた。その中には自分のことは自分で考え、強く生きるべきだという教訓、身体を積極的に動かすことの推奨など、『新少女』の雑誌の方針にも沿うと思われる記述が見受けられるのである。

## 6 フランス以外の西洋各国の文化に関する記事

フランス以外の西洋各国の文化に関する記事まで視野を広げると、小説や伝記だけでなく、文化史、理科（生物、博物学）、家事、地理、歴史など、記事のジャンルはさらに多岐にわたる。これらの多彩な記事、そして絵画や写真といった視覚に訴える記事は、西洋文化をより生き生きと伝えると同時に、本稿第2章で見たように、「科学的な記事や、実際的の知識や、衛生上の注意も、どうしたら、多くの少女が喜んで読んで、(...)我々の知らねばならぬ日常の知識を遺憾なく備へさせる」ための工夫であったと考えられる。

本章では、その中でもやはり最も頁が割かれたのが伝記と小説であるため、それについて紹介する。本稿第5章に引き続き、第3巻3号「有名なる世界の婦人」で紹介された女性をまずは見ていく。まずはマリア・モンテッソーリ（Maria Montessori, 1870–1952）やエレン・ケイ（Ellen Karolina Sofia Key, 1849–1926）など、児童教育や児童の権利擁護に尽力した人物がいる。たとえばモンテッソーリは、「婦人で羅馬の大学から医学博士の称号を受けた最初の人として、特に児童心理学に深かつたのです(...)その著書、『モンテッソーリ教育法』は、教育家の間に盛んに読まれもし、研究もされたのです」と功績を紹介するだけでなく、その教育法が「三つから七つまでの子供に、ご飯を食べることや、服を着たり脱いだりすることや、お湯に入ることや、何もかも一人でできる様に」したと、子どもが早く自立して生活できるように教えた人物として評価されている<sup>22</sup>。

そして特筆すべきは、婦人参政権論者のエメリーン・パンクハースト（Emmeline Pankhurst, 1858–1928）とクリスタベル・パンクハースト（Christabel Harriette Pankhurst, 1880–1958年）の親子が紹介された点である。ハンガー・ストライキなどの方法で婦人参政権運動を展開したイギリスの女性運動家であり、サフラジエットとも呼ばれたパンクハーストを、明治後期から大正初期に紹介した少女雑誌は、管見の限りでは『新少女』だけである。サフラジエットについては、日本でも非難・嫌悪の記事も書かれ<sup>23</sup>、その過激な行動が認識されていた。『新少女』では、女性解放運動に対しても積極的に肯定する言説も見られ、第3巻6号では、松本雲舟による伝記の連載「世界歴史物語」の中で、女性解放論者のエリザベス・スタントン（Elizabeth Cady Stanton, 1815–1902）の紹介も見られる。

松本雲舟の連載には、他の歴史的人物についても興味深い記述が見られる。たとえば、生涯結婚することなく国を統治したスウェーデン女王クリスティナ（Kristina, 1626–1689）に関し、「男のやうに育つた女王」と題された記事（第2巻5号）では、彼女が幼少期から男性のように育てられ、豪胆で頼もしい女性に成長する様子が肯定的に書かれた。

王さまは王女クリスチナを全く男のやうにお仕込みになりました。衣物も男のやうなの着せて、教育も男のやうになさいました。「偉くなれよ、お父さまのやうに偉くなれよ」と小さい王女を抱きかかへては、其の頬に接吻をなさいました。(...) 「いや、かまはずに大砲を打つがよい。クリスチナは軍人の娘だから、大砲の音になれさせておかねばならぬ」と言はれました。そこで間もなく城の内にある沢山の大砲は一時に鳴り轟いて、雷さんが百も千も一緒に落ちて来るやうな恐ろしい音を立てました。すると小さなクリスチナは、「もっと打て、もっともつと」と手を叩いて喜ぶのでした。王さまはそれを見て「流石におれの娘だ。これでこそ私の跡をつげる」と大喜びをなさいました。（松本雲舟「男のやうに育つた女王」『新少女』2巻5号、36-38頁）

<sup>22</sup> 「有名なる世界の婦人」『新少女』第3巻3号、1917年3月、31頁

<sup>23</sup> 堀場清子によると、たとえば、1910年8月に新聞記者兼作家の長谷川如是が「六月十八日の女壮士（サツフレジエット）の大行列」を『東京朝日新聞』で報じたのをはじめ、日本の新聞でもサフラジエットの過激な行動がしばしば否定的な論調で語られていた。（堀場清子『青鞆の時代—平塚らいてうと新しい女たち』岩波新書、1988年、50-51頁。）

しかし、クリスティナに対するこの評価は、従来の少女雑誌では一般的なものではない。たとえば『少女世界』では、クリスティナを、「可愛気のない、癪持の、高慢の、意地の強い、一口に約めると、一生女の身として、幸福に暮さうとするには、まったく不似合いな不適当な性質」の持ち主であり、「不幸な」女性であると、反面教師的に少女読者に紹介した<sup>24</sup>。このような点からも、『新少女』は、従来の少女雑誌と比較して、良妻賢母思想に疑義を呈し、女性解放思想を支持する傾向を持つ雑誌であったことが判明する。

最後に、本稿では、『サイラス・マーナー』と『ニコラス・ニツクルビー』の翻訳の様相については言及できなかったが、創刊から約3年間、毎号のように長編小説の翻案を掲載し続けた理由の一つを、翻訳者の言葉の中に見出されるように思われる所以、提示したい。つまり、「サイラス物語」（第1巻1号～第1巻6号）と「ニコラス、ニツクルベイ物語」（第1巻8号～第2巻12号）の執筆者、松岡久子（旧姓：田中久子）の言葉である。松岡久子は婦人之友社社員であるとともに、1915年に羽仁もと子の弟・松岡正男と結婚し、義理の妹として羽仁に深い共感を寄せ続けた。創刊者の言葉ではないが、『新少女』における積極的な海外文学の紹介を考える上では重要な証言であると思われる。

ジョージ・エリオットは、英国の女流文学者で、十九世紀の文豪の一人と謳はれた人です。サイラス・マーナーは、その傑作の一つとして評判の高い小説です。茲にその概略を掲げます。名著と云はれる程の小説は、文豪が思ひを苦しめただけそれだけ、読む方でもまた心をひそめて、本当によく読まなければ、名著の名著たる味ひの知れにくいもので御座います。どうか気をつけて深く上手に読んで下さつて、あと二三回で、この訳を終つた時に、サイラス物語の面白味はどこにあつたかを、お互に投書欄で話し合つて見たいと思ひます。（田中久子「サイラス物語」『新少女』1巻1号、1915年4月、40頁。）

翻訳者は、ジョージ・エリオットが文豪の一人であり、その傑作を紹介する所以、読者にも「心をひそめて、本当によく読むことを求め、最終的には、投書欄での話し合いの場を持つことも希望している。また、単行本版『ニコラス、ニツクルベイ物語』の「はしがき」では、自分自身のイギリス文学との出会いを振り返り、児童読者に翻案を紹介することの意義が述べられた。

私の入った女学校では、時間割の中に「図書室」といふ時間が特別に設けてあつて、一週間に一度、どの組も必ず図書室に入つて、備へ付けの本を自由に取って読むといふことになってゐた。（…）図書室の時間は、いはば私のためには、智恵の瞳が開かれたともいふべき、新しき世界への誘導であつた。中にも最も強く、私の興味を引いたのは、巖本善治氏の主幹された女学雑誌の綴本であった。そこには、私は若松しづ子の文名をもつて書かれた、『小公子』を読んだ。『セーラ・クルー』を読んだ。『我が宿の花』を読んだ。『離嫁』を読んだ。そしてその時から、いつかこれ等の本を原書で読んでみたいと言う念願を深く抱いた。（…）その後段々いろいろのよい作品を読むにつけ、世の少（わか）い人たちに、よい読み物を紹介したい願ひから、子供を目標に置いて、いくつかの略訳を試み、雑誌「新少女」の役に立てたことがある。（…）十九世紀の英國文豪の作品である。自分如きが容易に筆をつけることの許さるべきものでは、もとよりないが、子供に理解出来るだけの事件を引き抜いて、略訳して見たものである。然しかうしたものを読むことが、やがてよい作品を知る道程ともなれば、それは私にとつて望外の仕合せである。（松岡久子「はしがき」ディケンズ原作『ニコラス・ニツクルベイ物語』婦人之友社、1929年、1-3頁）

海外の長編小説の翻訳を呼び物として雑誌に掲載されたのは、まずは、文豪の作品の読解を通して、少女読者たちの思考や趣味、表現力を鍛えることを目標としていたためと考えられる。そしてそれは、松岡久子が自身の体験を引き合いに出して語るように、少女読者の「智

<sup>24</sup> 西村渚山「クリスチナ女王」『少女世界』第2巻4号、1907年3月、44頁。

恵の目を開」き、「新しい世界へ誘導」し、やがて「よい作品を知る道程」となること、つまり少女読者の知的な世界を広げ、さらなる出会いへつなげる可能性を高めることを期待したことであったと言えるのではないだろうか。

## 7 『新少女』における積極的な西洋文化受容の背景

『新少女』の積極的な西洋文化受容の背景として、本発表では次の三点をまとめとして指摘したい。第一に、『新少女』の西洋文化受容もまた、富山房「模範家庭文庫」シリーズ（1915年刊行開始）、1918年の鈴木三重吉（1882-1936）主催『赤い鳥』等に端を発する大正期の翻訳児童文学ブームの渦中の現象、または過渡期の現象として位置づけられるのではないかという点である。『新少女』創刊の際に、従来の少女雑誌を「不健全」と強く非難しつつ、『新少女』の堅実な紙面構成をアピールした点、ほとんど毎号において長編・短編の欧米の文学作品の翻訳を掲載し続けた点は、鈴木三重吉が、自らの標榜する芸術的児童文学を、従来の大衆的児童文学と区別し、差異化を図った点、そして『赤い鳥』にも海外の文学作品の翻訳が多数掲載された点とも共通点が見出されるように思われる。

第二に、羽仁もと子夫妻、社員で義理の妹の松岡久子、実弟の松岡八郎、五来素川、松本雲舟などの西洋文化に関連する記事の執筆者たちが、みなプロテスタント信仰者であったことも背景として大きいと思われる。実際に、西洋文化関連の記事の執筆者たちが、婦人之友社で植村正久（1858-1925）の指導の下、月に一度礼拝を行っていたという証言もあり<sup>25</sup>、彼らが誌面について話し合い、情報交換もしながら、積極的な西洋文化受容を促した様子も推測できる。また、本稿第2章でも述べたように、羽仁もと子は府立第一高等女学校に在学中に受洗し、明治女学校では巖本善治の『女学雑誌』の校正も担ったため、『女学雑誌』の影響もあったと思われる<sup>26</sup>。さらに、羽仁が『家庭の友』を創刊して間もない頃に、明治母の会などのプロテスタントの婦人会に入りしていた経緯なども考えると<sup>27</sup>、『新少女』における積極的な西洋文化の紹介には、羽仁が『新少女』創刊以前に触れたキリスト教文化の影響も大きいと考えられる。そして、本稿第6章の引用で見た通り、『サイラス・マーナー』と『ニコラス・ニクルビー』の翻案者、松岡久子は、児童向けの翻案執筆に『女学雑誌』の若松賤子の影響があったことを明確に述べている。

第三に、『新少女』の西洋文化関連の記事のうちの複数が、女性解放思想支持の傾向を持ち、読者の少女たちの可能性を広くとらえ、自立的な女性の育成を視野に入れたと考えられる点である。少女読者自身が持つ、思想と身体の成熟を重視した点で、『新少女』における教育は個人主義的であり、その観点は記事内の文章、伝記の被伝者の選出にも影響を与えたと言えるのではないだろうか。同時に少女読者たちに実際的な知識を広く与え、その知的な世界を広げるよう工夫された、多様なジャンルの記事の掲載も見受けられる。

本稿では、これまで読み物の記事の内容について論じられることの少なかった『新少女』という少女雑誌に掲載された西洋文化に関する記事について紹介し、その内容の特徴と背景、少女読者への教育観という観点からの誌面の傾向について紹介した。一つ一つの記事について、羽仁もと子や婦人之友社執筆陣の思想との関連の中でより詳細に考察することを今後の課題とし、また別稿で論じたいと思う。

※本稿は、科学研究費補助金（若手研究）「明治後期から大正初期の少女雑誌におけるフランス文学・フランス文化の受容」（課題番号 21K12971、令和3年度～6年度）の研究成果をまとめた一部である。

<sup>25</sup> 松岡久子「わが八十年」『婦人之友』第55巻4号、1961年4月、102頁。

<sup>26</sup> 井上輝子は羽仁もと子を巖本善治の思想の継承者の一人として、清水紫琴や相馬黒光らとともにその名を挙げている。（井上輝子「『女学』思想の形成と転回—女学雑誌社の思想的研究」『東京大学新聞研究所紀要』17号、1968年、35-62頁。）

<sup>27</sup> 亀田春枝「明治母の会と羽仁もと子」『婦人雑誌の夜明け』（近代女性文化史研究会編）、大空社、1989年、297-334頁。

補遺:『新少女』(第1巻1号～第3巻12号(3巻4号は除く))  
に掲載された西洋文化に関する記事一覧

巻号	発表年月	執筆者	記事名	ジャンル・備考	フランス 関連
1-1	1915.4	田中久子	サイラス物語(1)	小説, ジョージ・エリオット『サイラス・マーナー』 翻案	
		H.T.	虚栄の櫛	歴史(ローマ建国神話)	
			馬に乗つて狩猟にゆく西 洋の少女	写真	
			世界の少女 (其一 フランス)	石板口絵	○
			午後八時(アンゲルスの 鐘にならひて)	文化	○
1-2	1915.5	羽仁もと子	新少女伝(其二) ジャン・ダルク(1)	伝記(ジャンヌ・ダルク)	○
		ブーテ=ド=モンヴェル	ジャン・ダルクの出陣	口絵	○
		田中久子	サイラス物語(2)	小説	
			仙台の少女	ミッションスクール紹介	○
			世界一の釣鐘	地理・写真	
		H.T.	黄金の窓	短編小説, Laura.E.Richard "The Golden Window" 翻訳	
1-3	1915.6	羽仁もと子	新少女伝(其二) ジャン・ダルク(2)	伝記(ジャンヌ・ダルク)	○
		田中久子	サイラス物語(3)	小説	
			塩で出来た地底の市街	地理・写真	
		H.T.	天の使はどこにゐるでせ う?	短編小説	
		理学士 小南清	植物にも熱がある	生物・博物学	
		H M	声を写した写真	科学	
			神戸の少女	ミッションスクール紹介	
1-4	1915.7	羽仁もと子	新少女伝(其二) ジャン・ダルク(3)	伝記(ジャンヌ・ダルク)	○
		田中久子	サイラス物語(4)	小説	
		H.T.	名なし草	短編小説・サンチーヌ「ピッティオラ」翻案 (※)	○
			Good night	写真	
			私はリボンです	文化史(リボン)・産業	
1-5	1915.8	羽仁もと子	新少女伝(其二) ジャン・ダルク(4)	伝記(ジャンヌ・ダルク)	○
		田中久子	サイラス物語(5)	小説	
			植物は年々進化する	生物・博物学	
		男爵 阪谷 芳郎	父を信じて高空から飛ん だ少女	伝記(タイニー・ブロードウィック)	
			高き塔(ニューヨーク)	地理・写真	
		松岡八郎	動物のさまざま	生物・博物学	

1-6	1915.9	羽仁もと子	新少女伝(其二) ジャン・ダルク(5)	伝記(ジャンヌ・ダルク)	○
		田中久子	サイラス物語(6)	小説	
			砂漠の水槽 涼しい木	生物・博物学	
			ジャン・ダルクの銅像	歴史・時事	○
			ゴンドラと石漆舟	地理・写真	
		H.M.	旅芸人	短編小説(※)	
1-7	1915.10		生きた国旗	口絵・時事	
			米国の女学生の絵日記	口絵・文(ウェブスター『あしながおじさん』)	
		松岡久子	白雪姫と紅薔薇姫	童話(グリム童話)	
			私は時計です	文化史(時計)	
1-8	1915.11	松岡久子	ニコラス、ニツクルベー物語(1)	小説、ディケンズ『ニコラス・ニクルビー』翻案	
		島本久恵	少女家事 クリスマスの用意	家事(料理・裁縫)	
			岩石で出来た市街	地理・写真	
1-9	1915.12	松岡久子	ニコラス、ニツクルベー物語(2)	小説	
			クリスマスの前	写真	
		松岡八郎	マッチ売の少女	童話(アンデルセン童話)	
2-1	1916.1	松岡久子	ニコラス、ニツクルベー物語(3)	小説	
		(エドワード・ボインタ一画)	シバの女王ソロモンに見ゆ	口絵	
		H.M.	シバの女王ソロモンに見ゆ	短編小説(※)	
		河井醉茗	日本恋しや(1)	伝記(じゃがたらお春)	
			世界各国の通貨を統一すれば	経済	
2-2	1916.2	松岡久子	ニコラス、ニツクルベー物語(4)	小説	
		(ジョン・コリア一画)	クレオパトラの死	口絵	
		河井醉茗	日本恋しや(2)	伝記	
		松本雲舟	世界歴史物語 クレオパトラの死	伝記	
		記者	少女料理 手軽に出来る西洋菓子	家事(料理)	
2-3	1916.3	松岡久子	ニコラス、ニツクルベー物語(5)	小説	
			愛国の少女独探を発見す(1)	小説(出典不明)	
		河井醉茗	日本恋しや(3)	伝記	
		松本雲舟	世界歴史物語(二) 賢母モニカ	伝記(聖モニカ)	
		H.M.	私は鉛筆です	文化史(鉛筆)	
2-4	1916.4	松岡久子	ニコラス、ニツクルベー物語(6)	小説	

			エイプリル・フール	文化・逸話	
2-4	1916.4	松岡八郎	ゴサムの賢人	短編小説(※)	
		松本雲舟	世界歴史物語(三) 仲の好い兄と妹	伝記(ウィリアム・ハーシェル/カロライン・ハーシェル)	
2-4	1916.4		愛国の少女独探を発見す(2)	小説(出典不明)	
			少女滑稽新聞	フェイクニュース	
2-5	1916.5	松岡久子	ニコラス、ニツクルベー物語(7)	小説	
		松本雲舟	世界歴史物語(四) 男のように育った女王	伝記(スウェーデン女王クリスティナ)	
			新いろは辞典	外来語等	
			愛国の少女独探を発見す(3)	小説(出典不明)	
2-6	1916.6	松岡久子	ニコラス、ニツクルベー物語(8)	小説	
		松本雲舟	世界歴史物語(五) 愛の天使と言はれた少女	伝記(ドロシア・ディックス)	
2-7	1916.7	松岡久子	ニコラス、ニツクルベー物語(9)	小説	
		松本雲舟	世界歴史物語(六) 洗濯盥の女王さま	伝記(オルコット)	
		与謝野晶子	巴里のエレンヌさん	フランスの少女文化	○
2-8	1916.8	松岡久子	ニコラス、ニツクルベー物語(10)	小説	
		松本雲舟	世界歴史物語(七) 酒の神と戦つたおてんば娘	伝記	
			最も高い山、最も深い海	地理・写真	
2-9	1916.9	松岡久子	ニコラス、ニツクルベー物語(11)	小説	
		松本雲舟	世界歴史物語(八) 嘘の嫌ひなヴィクトリア女王	伝記(ヴィクトリア女王)	
			歐州戦乱に身を投じて 独軍に銃殺されたるエデス・キャヴェル女史	時事	
			手軽に出来るクールブディング	家事(料理)	
			新しい話	逸話・小話	
2-10	1916.10	松岡久子	ニコラス、ニツクルベー物語(12)	小説	
			飴菓子ヌガーの拵へ方	家事(料理)	
		松本雲舟	世界歴史物語(九) 一つの靈魂を分つた兄妹	伝記(詩人ワーズワースの妹)	
2-11	1916.11	松岡久子	ニコラス、ニツクルベー物語(13)	小説	
		松本雲舟	世界歴史物語(十) 火中に身を投じて三児を救へる女中の真心	伝記(アリス・エーアス)	
			新しい話	逸話・小話	
2-12	1916.12	松岡久子	ニコラス、ニツクルベー物語(14)	小説	

		松本雲舟	世界歴史物語(十一) 難船を救へる灯台守の娘  新しい話	伝記(グレース・ダーリング)  逸話・小話	
3-1	1917.1	五来素川	雑燕(1)	小説(マロ『家なき娘』翻案)	○
		松本雲舟	世界歴史物語(十二) 名優となつた靴直師の娘	伝記(ラケル・フェリクス)	
			西洋の世間話	逸話・小話	
3-2	1917.2	五来素川	雑燕(2)	小説	○
			西洋の世間話	逸話・小話	
		松岡八郎	伊太利美談 バタのお獅子	短編小説(※)	
			私は西洋紙です	文化史(紙)	
		松岡久子	敷物の下の塵埃	短編小説(出典不明)	
3-3	1917.3	五来素川	雑燕(3)	小説	○
		松本雲舟	世界歴史物語(十四) 人形と花と犬の看護から	伝記(ナイチングール)	
			有名なる世界的夫人	存命の女性の著名人の紹介(マリー・キュリー、サラ・ベルナールを含む)	○
			西洋の世間話	逸話・小話	
3-5	1917.5	五来素川	雑燕(5)	小説	○
		松本雲舟	世界歴史物語(十五) 断頭台の露と消えし美しき姫	伝記(ジェーン・グレイ)	
3-6	1917.6	五来素川	雑燕(6)	小説	○
		松本雲舟	世界歴史物語(十六) 三歳児の魂百までも	伝記(エリザベス・スタントン)	
		松岡久子	コロンブスと少女ニニア	短編小説(出典不明)	
			西洋の世間話	逸話・小話	
			新いろは辞典	外来語・外国文化の説明	
3-7	1917.7	五来素川	雑燕(7)	小説	○
		松本雲舟	世界歴史物語(十七) 他人の弱きを助ける心	伝記(クララ・バートン)	
		松岡久子	エルサの伯母さん	短編小説(出典不明)	
		八郎	西洋の世間話	逸話・小話	
3-8	1917.8	五来素川	雑燕(8)	小説	○
		松本雲舟	世界歴史物語(十八) お父さんのお乳はあまいのよ	伝記(トマス・モアと娘マーガレット・ローパー)	
		松岡久子	意外な! 夏休みの報酬	短編小説(出典不明)	
		八郎	西洋の世間話	逸話・小話	
			冷たい飲み物とお菓子	家事(料理、洋菓子)	
3-9	1917.9	五来素川	雑燕(9)	小説	○
		松本雲舟	世界歴史物語(十九) 女王の宝石から亞米利加発見	伝記(コロンブス/スペイン女王イザベラ)	

		松岡久子	意外な！夏休みの報酬	短編小説	
		八郎	西洋の世間話	逸話	
			東洋西洋歴史絵巻	歴史	
3-10	1917.10		西洋の文豪逸話	女性文学者の紹介 (ジョルジュ・サンドを含む)	○
		松本雲舟	世界歴史物語(二十) 奴隸を解放した女性の 筆の力	伝記(ストウ夫人)	
		松岡八郎	西洋の世間話	逸話	
			東洋西洋歴史絵巻	歴史	
3-11	1917.11		小さなナイチンゲール	写真	
		松本雲舟	世界歴史物語(二十一) 『貧民の家』を作れる娘	伝記(ジェーン・アダムス)	
		松岡八郎	西洋の世間話	逸話・小話	
3-12	1917.12		世界巡り	写真・地理	
		松本雲舟	世界歴史物語(二十二) お父さんのお室掃除からラヂウム	伝記(マリー・キュリー)	○
		松岡八郎	西洋一口噺	逸話・小話	
		山田まつ子	或る家のクリスマスに招かれた時	歴史	

(※)James Baldwin, *Fifty Famous Stories Retold* (1896) 掲載の小説の翻訳、それを介した重訳と思われる作品

(1)(2)...連載かつ続きものの長編小説の掲載回を指す。

この一覧表は、日本近代文学館、大阪府立中央図書館国際児童文学館における調査に基づく。